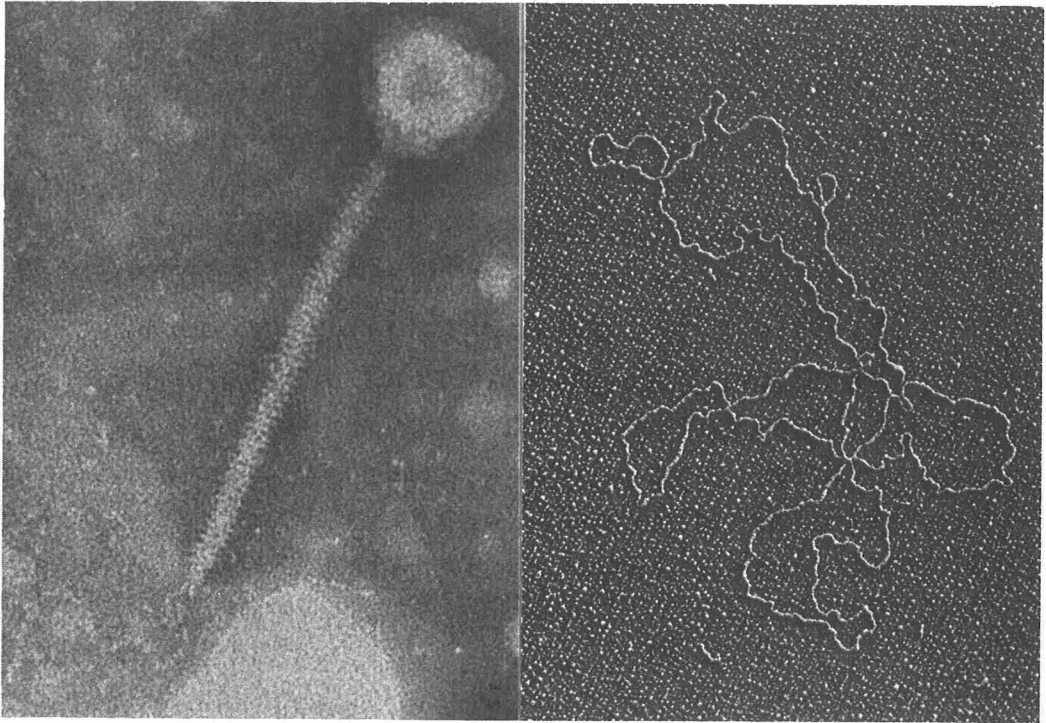


報 廣

東京大学理学部



目 次

表紙の説明	飯野徹雄	1
滋賀の都よ いざさらば	嶋 昭紘	2
I B Mサンホセ研究所での滞在を終えて	葉師久弥	3
名誉教授との懇談会		4
<学部消息>		7

表紙の説明

バクテリオファージは、DNAが遺伝物質であることを実証するのに役立ったのをはじめとして、分子遺伝学の創草期から発展期にかけての研究に重要な役割を果たした。遺伝子工学の技術の開発を契機として、分子生物学は最近では高等な生物を対象とする方向へと展開しつつあるが、そうした流れの中で、バクテリオファージは、また新しい役割を荷なって登場してきている。それは、組換えDNA実験でクローン化した遺伝子の運び手（ベクター）としての役割である。

左の写真は大腸菌を宿主とするバクテリオファージ λ （カイ）の粒子を、陰染色した電子顕微鏡写真である。正二十面体の頭殻から長い尾部が伸び、さらに尾部の先端に尾部繊維が伸びている。頭殻の径がほぼ60nmである。頭殻、尾部、尾部繊維はそれぞれ固有のタンパク質から成り立っている。このファージ粒子が大腸菌に出会うと、尾部繊維で吸着し、頭殻にふくまれている遺伝物質としてのDNAを、尾部を通して菌体内に注入する。右の写真は頭殻を人工的に破裂させて無傷のまま抽出したDNAの電子顕微鏡写真である。環状二重らせん型のDNA分子が一つながりの繊維として見られる。

このような環状DNAは、組換えDNA実験のベクターとして使うファージDNAやプラスミドに共通にみられる構造であって、宿主細胞に入ると自己複製することができる。遺伝子工学では、このようなDNAの特定の部位を制限酵素で切断し、別の生物から取り出した遺伝子のDNA断片をつないで雑種のDNAを作り出すのである。

遺伝子実験施設

飯野徹雄

滋賀の都よ いざさらば

嶋 昭 紘 (動物)

昭和58年9月1日付で、滋賀医科大学放射線基礎医学教室から、古巣の動物学教室放射線生物学講座の江上信雄先生のもとへもどってきました。7年半の空白のため、スムーズに反応できないことも多かろうと思いますが、よろしくお願いします。

滋賀医科大学は、国の無医大県解消政策にもとづいて昭和49年10月、滋賀県大津市に開学し、翌50年4月に第一期生100名を迎えました。私は51年4月に、放射線基礎医学教室の助教授として、本郷から赴任しました。その当時すでに大津市に建設中の本校舎の完成が大巾に遅れており、仮住いが長く続き、研究は完全に中断しました。最大の理由は、琵琶湖は近畿の水ガメなので、大学から出るすべての汚水を大学内で処理しなければ、処理ずみの排水の琵琶湖への流入は勿論のこと、排水管の敷設、ひいては大学の存在そのものすら認めないという、強力な反対運動があったためです。脇坂学長らの努力で、大学敷地内に污水处理施設の設置が文部省により認められ、校舎の建設が急がれました。この污水处理施設は、その後多くの大学や民間会社の手本となった先駆的なものでしたが、運転費として当時で年間三千万円程が必要とされ、文部省からの特別予算に加えて講座新設費や建屋の単価削減等によって、なんとかまかなわれていました。汚水の原点処理という考え方自体は、環境問題に対する一つの有効な対策だと思いますが、滋賀県の場合には、下水道の普及率が数%という特別な事情もからんでいたと思います。

次に手間どったのは、所謂R I施設の建設です。一般排水ですら上のような状態でしたから、放射性廃液をどう処理するか。結局、原点処理の原則

にしたがい、大学のR I施設内で濃縮乾固するという大変な方式を取ることになりました。これにも、文部省の特別な理解が示され、立派なR I実験施設が完成しました。

所謂地方大学にしては、文部省からの破格(と私は思います)の理解がえられたのは、本格的な無医大県であった滋賀県の実情(人口約100万人の県下の医師の数は、私の記憶では950人位)と、琵琶湖という近畿の水ガメの存在によっていたと思います。約4000平方キロの滋賀県の、20%近くの面積を占める琵琶湖は、なんとと言っても、近畿2府4県のいのちの水の供給源です。同時に、滋賀県を東西南北に分断し、「近江八景」に象徴される多彩な風土を醸しだした最大の要因でもあります。最近、滋賀県は琵琶湖の学際的な研究を推進するために、県立琵琶湖研究所を創立しました。壬申の乱で消滅した大津京以来、有史日本史の表裏を見つめてきた琵琶湖は、私にとっても忘れがたい風土であると思います。

ここで、日本史の教科書にはまず登場することはない話題を一つ紹介します。聖武天皇が平城京へ都をもどされる前のほんの短期間、紫香楽宮(しがらきのみや)を造営されたことは、御存知のかたもあるかと思います。滋賀医大から車で南西に40分程山狭の小径を走りますと、小さな盆地がひらけ、ここに紫香楽宮跡があります。今は礎石だけが残っていますが、ここを訪れる人は殆んどいないようです。この地から、聖武天皇は東大寺の盧舎那大仏造営を発願されたといひます。「紫香楽」は今は「信楽」と書きます。茶道に興味をお持ちのかたは、信楽焼を御存知でしょう。茶器としての信楽焼は、千利休らの恩恵をこうむって、

室町・桃山時代にその確固たる礎を築きました。火鉢や瓦があまり使われなくなった現在は、茶器以外に植木鉢やタイルが主な製品になっていますが、信楽の狸の焼物は知る人ぞ知る名物なのです。狸の焼物が焼かれはじめたのは、百年程前からのことですが、何故狸が選ばれたのかは定かではありません。動物学的にも、うまく説明はできません。一般に狸というと、狸親父、狸顔、狸寝入り、狸婆、あげくは狸の腹鼓などがあまり良い形容詞としては使われていませんが、これはむしろ民俗学的研究の対象として興味あることだと思います。焼物の狸にも、大量生産とはいえ、それぞれ表情があり、ストレスの解消にもってこいといった福

相タヌキも居ます。

滋賀医大に居りました7年半のうち、最初の数年間は殆んど研究室のセットアップ等の仕事に費やしたあと、主として魚類の個体と培養細胞を用いて、エイジングと発癌、DNA修復の問題と取り組みました。また小児科との共同研究として、初代培養細胞を用いた種々の遺伝病患児のスクリーニングもかなりやりました。本郷へ移る少し前からは、ヒトとサカナの培養細胞を融合させて、光回復遺伝子の研究も開始しました。滋賀医大での研究成果は、論文として順次公表してゆきたいと思います。

I B M サンホゼ研究所での滞在を終えて

薬 師 久 弥 (化学)

昭和57年6月1日よりIBMサンホゼ研究所で一年間の研究生活を送る機会を得ましたので、当時をふりかえて印象に残った事を思いつくままに書かせていただきます。

サンホゼはカリフォルニア州の中部、サンフランシスコからサンフランシスコ湾に沿って走るフリーウェイを車で2時間程南へ下った所にある町で、スタンフォード大学の少し南に位置しています。この付近一帯はシリコンバレーと呼ばれるサンタクララ渓谷の中にあつて半導体メーカーがひしめきあっている地方です。IBMの研究所はサンホゼの南の端にあり、私の家族は研究所から徒歩5分の所に家を借りました。大家さんの話ではこの付近は十数年前までは果樹園だった所で、ここ数年で人口が急増している新しい町です。いまでも当時の面影を残しているのは近くにあるガラガラ蛇の出没する丘のあたりで、その丘の中復から町のかなりの部分が見渡せます。この丘に休日子供たちと登っている途中、野性の鹿に出くわし

た事もありました。

いまどきアメリカの生活といっても日本人と大して相異なるまいと思っていたのですが、衣料品その他の生活物資が粗末で高価である反面、エネルギーや食料品といった基本的なものが安いので、贅沢さえしなければ日本の生活よりもはるかに快適でした。またこのような生活を30年も前から享受しているアメリカに改めて感心しました。昭和25年頃、本学法学部の川島武宣教授がスタンフォード大学で一年間講義を担当された時の体験を書かれた紀行文を読んだ事があります。川島教授は当時のカルフォルニアの人々の生活様式を驚きの目で文章に綴っておられました。私たちの見たカリフォルニアの人々の生活が30年前に書かれた紀行文とそっくりそのままである事に驚かざるを得ない思いをしました。それは戦勝国アメリカの人々の生活が戦後40年間で大きく変貌していった日本人の生活と好対照をなしている事に対するものでした。

IBMの基礎研究所はニューヨークのヨークタウンハイイツ、スイスのチューリッヒ、そしてカリフォルニアのサンホゼの3ヶ所にあります。サンホゼ研究所は高分子材料を研究している化学者が比較的多い研究所です。私はポリピロールという導電性高分子についての光吸収に関する仕事を主に行いました。最初の研究打ち合わせの時何をやってもよいと言われ、高分子材料を扱うのがはじめての私にとって最初の4ヶ月はいろいろと試行錯誤で仕事の種をみつけるのに費してしまいました。実際に目標を決めて動いたのは8ヶ月位ですが、最後の2ヶ月は現地の生活に慣れてきたこともあって最も充実した毎日を送る事ができました。日本を出発する時は大学とは異なる民間会社の研究所であるということていろいろな制約を予想していました。また昭和57年6月といえば日立・三菱とIBMとの間に一騒動があった時期で毎夜そのニュースがテレビを賑わしていた頃です。幸いな事にそれらは全て杞憂に終わりました。研究所の中では全く自由で、身分証明書である顔写真入りの磁気カードを持っていれば休日であれ夜間であれいつでも研究所内に入出入りする事ができました。同僚の話では研究所の規則では8時20分が出勤時間だとの事ですが、一般の研究者は大方8時30分が出勤時間で、9時頃になってやっと皆が出そろうといった様子でした。サンホゼ研究所には毎年

50名以上の研究者が世界各地から一年契約で働きに来ていますし、夏期には大学院の学生が3ヶ月契約で働きに来ますので、迷路のような三角形の建物の中の人口密度は大変高く、殆んど歩いている人に出会わないサンホゼの町と対照的です。帰宅時間は早く事務職員は4時には帰ってしまい、6時を過ぎると極端に人気がなくなってしまいます。6時以降はそれまできこえてきていた英語に代って、外国からの出稼ぎ組が話すドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語それに日本語が氾濫するといった按配でした。

一年間大学を離れてみて一番強く感じました有難った事は、多分皆様と同じ感想でしょうが、時間をさかのぼって大学院の学生に戻ったような錯覚をおぼえた事です。自分の仕事だけ考えておればよい、時間をたっぷりと使えるという生活を一年間続けられた事は何物にもかえ難いものでした。通勤時間5分という地の利を得た事にもよるのですが、特別の場合を除いて週休二日制を守り、また休暇をとってあちこちと随分旅行にも出かけたのですが、日本にいる時よりも能率よく仕事のできた事に今更ながら驚いています。これも集中して仕事のできる環境にめぐまれたからだと思います。これをよい機会に、これまでの時間の使い方について大いに反省をしているところです。

毎月1日は

「省エネルギー」

の日です。

名誉教授との懇談会

10月29日（土）正午から、学士会分館において、恒例の理学部関係名誉教授懇談会が、平野龍一総長もお招きして、午餐をかねて行われた。

本年も、木村健二郎先生（87歳・化学教室）をはじめ多数の名誉教授の先生方と江上学部長、田丸・西島元学部長および海野・有馬両評議員など総勢46名が出席された。

例年は、11月中・下旬に開催していたが、今年は冬将軍の早期到来を予期し、半月ほど繰上げて開催したこともあって、たいへんうらかな秋日和にも恵まれたこともあってか近年になく盛会であった。

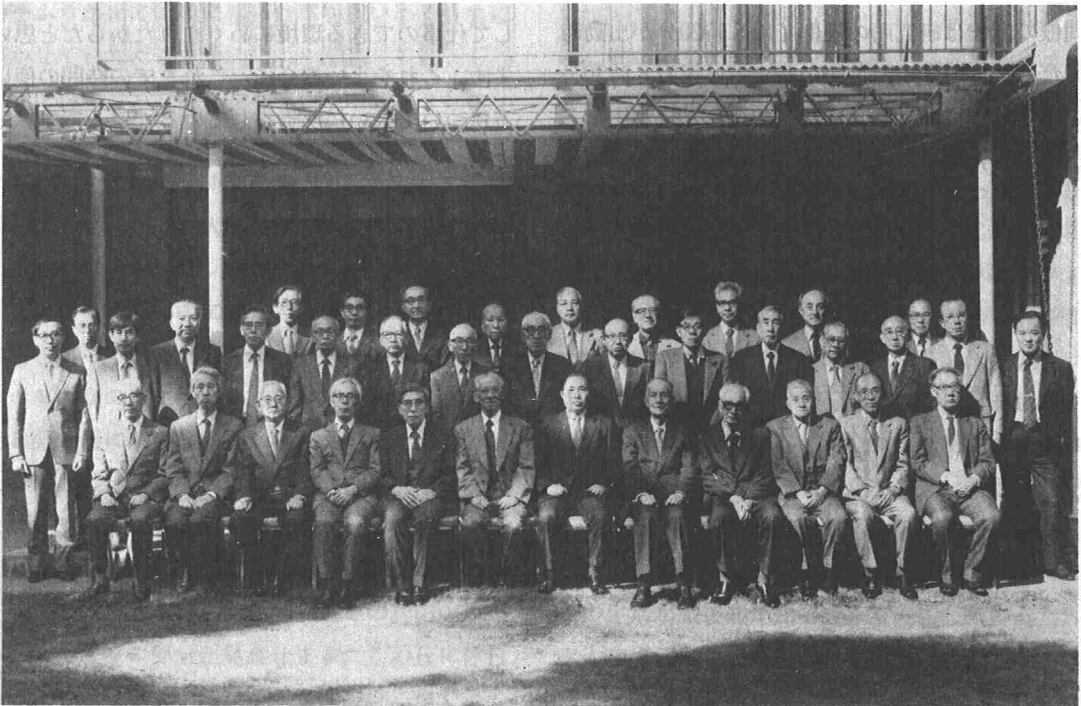
懇談会は、石渡事務長が開会を宣し、江上学部長の挨拶、ついで、さきの三宅島噴火などの火山に関連して、その構造等について、地質学教室（岩石学）久城育夫教授による『マグマについて』と題する特別講演がスライドを用いて行われ大きな

感心を得た。

また、学士会分館中庭で記念撮影を行った後、江上学部長から学部関連の近況報告等があり、ご出席先生の最高齢者の木村先生の音頭により乾杯し、午餐をかね懇談にうつった。まず、平野総長からご挨拶と学内の状況報告等があり、つづいてご出席された先生全員から近況報告や学部への要望や意見などがよせられ終始なごやかに有意義に懇談されました。

とりわけ、この懇談会はとても意義があるので今後も毎年継続して開催してほしいとの要望もあり、理学の一層の発展の熱情を約し、ご健康と再会を誓い、閉会を惜しみつつ午後3時15分散会した。

因に、当日ご出席された先生はお写真のとおりでとてもご壮健であられました。



〈学部消息〉

教 授 会 メ モ

11月16日（水）定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 昭和59年度文部省内地研究員の受入れについて
(4) 入学試験に関する事項について
(5) 人事委員会報告
(6) 会計委員会報告
(7) その他

12月21日（水）定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 教務委員会報告
(4) 企画委員会報告
(5) その他

次回予定：昭和59年1月18日（水）13時30分より

於、理学部化学教室本館5階講堂

理学部長と理職との交渉

学部長と理職の定例交渉は10月20日及び11月28日に理学部会議室で行われた。主な内容は以下のとおりである。

1. 人事院勧告の完全実施について

理職は、本年度の人事院勧告について、政府がこれを無視し、一方的に2%引き上げを決定したことは、労働基本権の代償措置を無視した暴挙で、憲法違反の疑いもあると主張し、学部長の意見を求めた。これに対し学部長は、「人事院勧告制度の主旨からみて、大変遺憾に思う。国大協としても10月4日提出の要望書の趣旨が入れられなかった。組合の主張は総長に伝える。」と答えた。

2. 期限付定員外職員問題について

理職は、該当職員を改めて採用できるように努力してほしいと学部長に求めた。学部長は、「問題になっている職務は、研究・教育上極めて重要なもので、本来定員化すべきものかもしれない。該当教室や該当職員の意向もよく聞いた上で、最善の道を選びたい。」と答えた。

3. 教務職員の助手への振り替えについて

理職は、かねてより号俸が頭打ちになっている教務職員のうち、専門性の高い人を助手に振り替えるよう強く要望してきた。この件について学部長は、「理職の要望は理解できる。しかし、学部としても独自にこの問題に取り組んでいるので見守ってほしい。」と答えた。

4. 昭和60年の定年制実施に伴う諸問題について

昭和60年から、60歳定年制が施行されることに伴ない、教職員の勤務のあり方等に大きな影響がでる可能性がある。これに伴う種々の問題について、理学部の研究と教育を発展させる見地から、学部当局と理職は随時協議してゆくことになった。

その他、行（二）から行（一）への格付変更問題等について議論がなされた。

人 事 異 動 報 告

(助 手)

所属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
物 理	助 手	廣 瀬 宜 郎	58. 8. 10	死 亡	事 故
天 文	助 手	斉 尾 英 行	58. 10. 1	採 用	
物 理	助 手	小 森 文 夫	58. 12. 1	採 用	
地 物	助 手	中 川 義 次	58. 12. 1	採 用	
化 学	助 手	難 波 秀 利	58. 12. 16	採 用	学習院大助手より

(講師以上)

生 化	講 師	室 伏 擴	58. 8. 16	昇 任	生化助手より
動 物	助 教 授	嶋 昭 紘	58. 9. 1	配 置 換	滋賀医大助教授より
動 物	講 師	八 杉 貞 雄	58. 10. 16	昇 任	動物助手より
化 学	助 教 授	浜 口 宏 夫	58. 11. 16	昇 任	化学講師より
物 理	講 師	高 橋 令 幸	58. 12. 1	昇 任	物理助手より

(職 員)

化 学	事 務 官	中 泉 明 美	58. 9. 1	採 用	
物 理	事 務 官	佐々木 かおる	58. 9. 16	辞 職	
物 理	事 務 官	川 口 江 理 子	58. 9. 21	転 任	岩大図書館より
地 質	技 官	田 康 子	58. 9. 30	勸奨退職	
物 理	事 務 官	小 林 智 恵 子	58. 11. 1	採 用	

海 外 渡 航 者

(9 月)

所属	官職	氏 名	渡航先国	渡航期間	渡 航 目 的
植 動	教 授	古 谷 稚 樹	連 合 王 国	9. 6 ~ 9. 20	第 1 回 国 際 シ ン ポ ジ ウ ム に 出 席, 及 び 英 国 光 生 物 学 会 シ ン ポ ジ ウ ム 出 席 の た め
物 理	助 手	長 山 好 夫	ド イ ツ 連 邦 共 和 国 フ ラ ン ス 連 合 王 国	9. 2 ~ 9. 24	「核融合とプラズマ物理の第11回ヨーロッパ国際会議」出席及びプラズマ物理実験学に関する研究連絡のため
地 質	助 手	福 山 博 之	ア メ リ カ 合 衆 国	昭 59 9. 10 ~ 9. 9	高 圧 下 に お け る 岩 石 の 物 性 に 関 す る 研 究 の た め
人 類	助 教 授	西 田 利 貞	タ ン ザ ニ ア 連 合 王 国	昭 59 9. 10 ~ 2. 18	ア フ リ カ 大 型 類 人 猿 の 比 較 研 究 の た め

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
鉱物	助教授	武田 弘	ドイツ連邦共和国	9. 3 ~ 9.11	第46回国際隕石学会年会, 同評議会, 隕石命名委員会および国際地球化学連合共催シンポジウム出席および隕石鉱動に関する研究打合せのため
素粒子	助手	佐藤 朝男	ドイツ連邦共和国	9. 6 ~ 10. 8	国際共同実験電子・陽電子衝突実験のため
情報	助教授	前川 守	フランス	9.16 ~ 9.27	情報処理国際連盟 (I F I P) の世界コンピュータ会議に出席及びコンピュータに関する研究打合せのため
化学	助手	吉藤 正明	フランス, スイス, オランダ, ドイツ連邦共和国	9. 3 ~ 9.22	「リンの化学に関する国際会議」に出席および有機化学に関する研究連絡のため
化学	教授	田 隅 三生	ブルガリア, イタリア, ドイツ連邦共和国	9. 7 ~ 9.18	第16回ヨーロッパ分光学会議出席および構造化学に関する研究打合せのため
中間子	助教授	永 嶺 謙 忠	スイス アメリカ合衆国	9.12 ~ 10.17	大強度中間子・反陽子ビームによる原子核・物性に関する調査研究のため
物理	助手	野崎 光昭	ドイツ連邦共和国	9.12 ~ 10. 3	e^+e^- 相互衝突装置「PETRA」及び e^+e^- 測定装置「JADE」による万能型測定装置及び測定のためのソフトウェアの調査・研究のため
物理	教授	有馬 朗人	中華人民共和国	9. 7 ~ 9.20	原子核の集団運動状態の研究会に出席及び原子核理論に関する研究連絡のため
動物	学部長 教授	江上 信雄	シンガポール	9.21 ~ 9.23	理学分野における日本とシンガポールとの交流計画の調査・検討のため
物理	助教授	中井 浩二	アメリカ合衆国	9.22 ~ 10. 3	QUARK MATTER 1983年国際会議出席及び原子核物理学に関する研究打合せのため
地質	教授	飯島 東	アメリカ合衆国	9.24 ~ 10. 9	第8回 Pecora シンポジウム参加及び高度リモートセンシング技術の動向調査のため
物理	教授	小柴 昌俊	ドイツ連邦共和国	9.26 ~ 10.20	e^+e^- 相互衝突装置「PETRA」及び e^+e^- 測定装置「JADE」による万能型測定装置及び測定のためのソフトウェアの調査・研究のため
数学	助手	楠岡 成雄	アメリカ合衆国	9.29 ~ 12.10	確率論に関する研究のため
物理	助教授	永宮 正治	アメリカ合衆国	9.24 ~ 10.14	日米共同研究打合せ及びクォーク物質国際会議出席のため
(10 月)					
数学	講師	加藤 和也	フランス	10. 1 ~ 3.31 昭59 昭59	P進体上の代数多様体のP進コホモロジーの共同研究のため
地質	助手	大路 樹生台	台湾	10. 4 ~ 10.23	琉球列島及び台湾近海の海洋底生動物調査

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
数 学	助教授	塩 田 徹 治	アメリカ合衆国	10. 3 ~ 12. 4	代数幾何学に関する調査・研究のため
数 学	助 手	坪 井 俊	フ ラ ン ス	昭 59. 10. 6 ~ 6.25	位相幾何学とくに葉層構造論の研究のため
化 学	教 授	向 山 光 昭	アメリカ合衆国	10.22 ~ 11. 3	有機合成化学に関する調査研究のため
地 理	教 授	鈴 木 秀 夫	大 韓 民 国	10. 9 ~ 10.16	韓国の地理とくに地形の研究のため
物 理	助教授	佐 藤 勝 彦	ベルギー, デン マーク, ドイツ 連邦共和国	10. 9 ~ 11. 9	モノポール・ガット宇宙初期研究会及びブルメートル国際シンポジウムに出席及び宇宙物理学に関する研究調査のため
情 報	教 授	山 田 尚 勇	中華人民共和国	10.10 ~ 10.16	「1983年中国情報処理国際会議」出席のため
情 報	助 手	山 口 和 紀	アメリカ合衆国	10.11 ~ 10.15	CAPAIDM (画像データベース管理のためのコンピュータアーキテクチャワークショップ) 国際会議に出席するため
情 報	助教授	前 川 守	アメリカ合衆国	10. 9 ~ 10.21	コンピュータ研究に関する情報交換と研究促進のためにテキサス大学 (オースチン) での研究打合せに出席するため
物 理	助 手	矢 崎 茂 夫	スイス連邦共和国	10.14 ~ 12.19	ハドロンの分光学の研究のため
生 化	助 手	東 島 勉	アメリカ合衆国	昭 59. 10.14 ~ 9.30	ホルモン情報伝達に関する研究
物 理	助教授	釜 江 常 好	アメリカ合衆国	10.15 ~ 10.23	日米科学技術協力事業の一環として「電子・陽電子衝突型加速器による新粒子検出実験」に参加するため
植物園	教 授	岩 槻 邦 男	インドネシア	10.24 ~ 11.20	スラウェシ・セラム島の植物の分類学的研究
植物園	講 師	加 藤 雅 啓	インドネシア	10.24 ~ 12.24	スラウェシ島・セラム島の植物の分類学的研究
地物研	助 手	岩 上 直 幹	イ タ リ ア	10.23 ~ 10.30	気球比較観測データ検討会出席のため
地物研	助教授	小 川 利 紘	イ タ リ ア	10.23 ~ 10.30	気球比較観測データ検討会出席のため
生 化	助教授	溝 渕 潔	アメリカ合衆国	10.29 ~ 11. 7	マサチューセッツ工科大学生物学科百年際記念シンポジウム出席及び分子生物学に関する研究打合せのため
物 理	教 授	橋 本 英 典	中華人民共和国	10.24 ~ 10.29	アジア流体力学会議に出席のため

(11 月)

数 学	教 授	小 松 彦三郎	ドイツ連邦共和国, ベルギー	11. 6 ~ 11.20	「超局所解析と偏微分方程式」会議出席および研究連絡のため
-----	-----	---------	----------------	---------------	------------------------------

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
天文	教授	高倉達雄	中華人民共和国	11.19～11.28	太陽物理国際ワークショップ出席のため
物理	教授	飯田修一	アメリカ合衆国	11.7～11.21	第29回磁気学及び磁性材料会議出席及び磁性物理学に関する研究連絡のため
情報	教授	國井利泰	アメリカ合衆国	11.14～11.20	AUTOFACT 5 出席とインターグラフィックス'84打合せのため
天文	助教授	吉村宏和	中華人民共和国	11.16～12.5	国際共同研究「恒星の太陽物理学」の研究実施のため
天文	助手	桜井隆	中華人民共和国	11.16～12.5	国際共同研究「恒星の太陽物理学」の研究実施のため
天文	教授	海野和三郎	中華人民共和国	11.19～12.3	国際共同研究「恒星の太陽物理学」の研究実施のため
化学	教授	大木道則	台湾	11.23～11.28	アジア太平洋地域第一回科学教育会議に出席のため
物理	教授	宮沢弘成	インド	昭59. 11.29～1.10	素粒子理論の研究実施のため
物理	助教授	釜江常好	アメリカ合衆国	11.16～11.23	電子・陽電子衝突型加速器による新粒子検出実験
物理	教授	山崎敏光	カナダ アメリカ合衆国	11.27～12.5	TRIUMF の長期計画委員会及びLBL のプログラム委員会に出席のため
動物	教授	代谷次夫	アメリカ合衆国	11.30～12.23	姉妹染色系交換の国際研究集会出席及び発生生理学に関する研究打合せ・追加実験を行うため
情報	教授	山田尚勇	シンガポール	11.19～12.4	漢字文書入力処理に関する研究

(12 月)

物理	助手	長山好夫	アメリカ合衆国	昭59. 12.4～3.18	Z T-40の理論及び計算機を用いた研究のため
物理	助手	大門寛	アメリカ合衆国	昭59. 12.26～1.1	第38回アメリカ化学会北西支部学会出席および光電子回析に関する研究打合せのため
数学	助手	岡本久	フランス	12.10～12.18	「工学と応用科学における計算の方法」に関する第6回国際会議出席のため
物理	助教授	堀田凱樹	インド	12.11～12.21	第15回国際遺伝学会出席および生物物理学に関する研究打合せのため
化学	助手	巻出義紘	アメリカ合衆国	12.10～12.24	「レーザ1983国際会議」出席および放射化学に関する研究調査のため
植物	教授	飯野徹雄	インド	12.10～12.23	第15回国際遺伝学会会議出席のため
情報	助教授	佐藤雅彦	オーストラリア	昭59. 12.19～1.20	「論理と計算会議」・「第5世代プログラム言語会議」出席及び情報科学に関する研究連絡のため

昭和58年度学部長杯争奪全理学部バレーボール (6人制) 大会無事終る

11月30日(水)12時より、理学部1号館中庭バレーコートにおいて、化学・稲本研対地質・柳井部屋チームの決勝戦が行われ、2:0で地質チームが見事優勝した。続いて、閉会式が行われ成績発表、江上学部長から賞状、優勝杯、賞品等が授与され、約1か月半もの長期にわたった大会が無事幕を閉じた。準優勝は、化学・稲本研、3位化学・向山研一軍、4位同二軍チームであった。5号館から優勝チームがでたのは、はじめてであり、チーム構成は、「院生5人、学部学生3人で、学部学生3人のうち、2人は東大バレー部に所属し、ほかの1人も中学時代にバレー部員だったそうで、たいへん優れた選手にめぐまれたため優勝することができた」とは、代表者柳井君の弁である。

この大会は、10年ほど前から吉野事務長杯名でスタートし、その後田丸学部長から優勝杯を寄贈していただき、学部長杯争奪大会と改名され、現在に至っているもので、大会の目的等は、同じ学部に通学しながら各号館(建物)がとりわけ地理的に散在しており、全体の交流や親睦等の場がほとんどない状態なので、これら教職員、学部学生、大学院生などが少しでも交流をはかり、親睦を深めることを目的に企画実施されたものです。当初は30チーム位の参加がやっとであったが、年毎に次第に多くなり、一昨年頃からは、50チーム

を越し、そのチーム編成も、研究室、事務室、職種別、同好会や全学部的などのさまざまな単位でエントリーされ、研究室チームには留学生なども加わり、国際色豊かなチームも数多くあり、たいへんにバライティに富むとても賑やかで楽しい大会である。

また、本大会の運営は、各年度毎に学生・院生自治会、理職青婦部などからなる実行委員会を組織し、企画連絡調整、協力しあっています。本年度の実行委員は、委員長・物理院生吉田君、副委員長・化学院生塚原君、情宜・学部自治会大林君・芝地君、会計・総務は物理秘書室五斗さん、化学秘書室宮内さん、理職青婦部長谷川さんの顔ぶれでした。

なお、大会費用は、学部長、理職、院生・学生自治会などからのご援助により、そして、審判等は各チームの協力によって行われています。

本大会は、単にゲームに参加するだけでなく、かかる企画、運営等のすべてが理学部各構成員が、まさに一体となった皆んなの手づくりの大会です。

因に、今大会の組合せ等は次のとおりである。来年度以降も、より一層充実し、有意義な大会となっていかなことを願ってやまないものである。

(事務部、菊)

あなたです!

火事を出すのも

防ぐのも

編集:

矢崎 紘一 (物理)	内線	4 1 2 3
松野 太郎 (地物)		4 2 9 9
露木 孝彦 (化学)		4 3 5 7
田賀井 篤平 (鉱物)		4 5 4 4
尾本 恵市 (人類)		4 4 8 2
